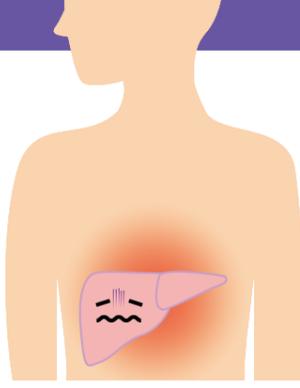


# “肝臓病”



宮崎医療センター病院  
副院長(兼) 消化器・肝臓病センター長  
宇都 浩文

## 主な肝臓病

### ウイルス肝炎

肝炎の原因の多くはウイルス性の肝炎です。肝炎は、急性肝炎と慢性肝炎に分けられ、急性肝炎の一部は慢性肝炎に移行します。また、ウイルス性の慢性肝炎の約7割がC型慢性肝炎で、約3割がB型慢性肝炎です。

ウイルス性の慢性肝炎（B型慢性肝炎とC型慢性肝炎）は、以前はインターフェロンという注射での治療が主な治療法でしたが、治療効果の高い内服薬が使用可能となり、最近は注射による治療を受ける方は少なくなりました。また、B型慢性肝炎の患者さんは抗ウイルス剤を長年にわたって内服する必要がありますが、C型慢性肝炎の患者さんは12週～24週間の内服薬治療のみで、ウイルスが完全に排除でき、C型慢性肝炎を治すことが出来るようになりました。

### 脂肪肝、脂肪肝炎

肝臓には中性脂肪などを蓄え、必要時にエネルギーの基として放出する機能があります。しかし、蓄えた中性脂肪が使うエネルギーよりも過剰となれば、余分な中性脂肪が肝細胞に蓄積し、脂肪肝の状態になります。

脂肪肝の種類は、お酒の飲み過ぎが原因の「アルコール性の脂肪肝」と、肥満、糖尿病などが原因の「非アルコール性の脂肪肝」に大別されます。また、非アルコール性の脂肪肝は食べ過ぎが原因のことが多く、最近は、メタボ（メタボリックシンドローム）や糖尿病などの生活習慣病との関係も指摘されています。脂肪肝は、原因を問わず、脂肪肝炎から肝硬変、肝がんへと進行することがあり、放置してはいけません。

### 肝硬変

ウイルス性慢性肝炎、お酒の飲み過ぎ（アルコール性肝障害）や生活習慣病（肥満や糖尿病による非アルコール性の脂肪肝）などによって肝細胞の障害が持続すると、肝臓の中に線維状のものが出現・増加してきます。さらに肝臓の線維化が進むと、肝臓の表面はでこぼことなり、肝臓は硬くなります。このような状態を「肝硬変」といい、肝臓の動きは低下しています。

#### 【原因】

B型慢性肝炎やC型慢性肝炎が原因として頻度が高く、お酒の飲み過ぎでも肝硬変になります。また、お酒を飲まない人でも、肥満や糖尿病を背景に非アルコール性脂肪肝炎（NASHといわれます）を発症し、肝硬変に進行することがあります。自己免疫性肝炎、原発性胆汁性胆管炎といった免疫の異常による疾患が原因の場合もあります。

#### 【症状】

肝硬変の初期は、ほとんど症状はなく、日常生活にも支障はありません。一方、病状が進行すると、腹水や黄疸といったさまざまな症状や合併症が出現してきます。すなわち、肝臓病は沈黙の臓器といわれ、肝疾患では症状が出ることは稀ですが、病気がかなり進行すると、肝臓が悲鳴をあげて、様々な症状が出てきます。

#### 【診断】

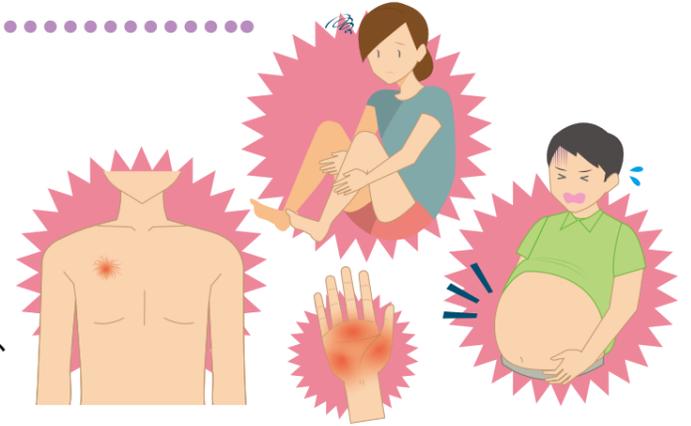
肝硬変は、超音波（エコー）やCTなどの画像検査と血液検査を組み合わせで診断することが多いです。肝臓の硬さを計測する装置（フィブロスキャン）も診断に有用です。しかし、初期の肝硬変は診断に苦慮することがあり、肝生検という方法で、皮膚から肝臓に針を刺し、肝臓の一部を採取し、診断することもあります。

#### 【治療】

B型やC型肝炎ウイルスが原因の場合は、抗ウイルス剤による治療を考慮します。アルコールや生活習慣病が原因の場合は、禁酒や生活習慣の改善を行います。また、原因を問わず、肝硬変の症状や合併症に対しては、薬物療法などによる対症療法を行います。

#### 進行した肝硬変の特徴的な症状

- ・尿の色が濃い：茶色っぽく濃くなる
- ・浮腫：足のむくみがひどくなる
- ・腹水：おなかがカエルのように膨らんでくる
- ・黄疸：皮膚や目の白い部分が黄色くなる
- ・手掌紅斑：手のひらが赤くなる
- ・クモ状血管腫：胸や首に赤いクモ状の斑点が出る
- ・女性化乳房：男性の乳房が女性のように膨らんでくる
- ・その他：かゆみ、疲れやすい・体がだるい、食欲がない、熱っぽいなどの症状



### 肝がん

肝臓にできる悪性腫瘍（がん）は主に肝細胞がん、胆管細胞がん、転移性肝がんの3つに分類されます。他の臓器のがんが肝臓に転移した場合は転移性肝がんといいますが、「肝がん」というと肝細胞がんを指すことが多いです。

#### 【原因】

肝細胞がんは慢性肝疾患（慢性肝炎や肝硬変）を背景に発症することが多く、C型肝炎ウイルスによる慢性肝疾患が原因としては最も頻度が高いです（図1）。また、アルコールや脂肪肝が原因となる場合もあります。C型肝炎ウイルス感染者はC型肝炎ウイルスに感染してから慢性肝炎、肝硬変を経て肝細胞がんを発症すると言われており、年齢を重ねると肝細胞がんのリスクは高くなります。一方、B型肝炎ウイルス感染者では、肝硬変を経ずに肝細胞がんを発症することが少なく、比較的若い年齢（40歳以下）でも肝細胞がんを発症することがあります。

#### 【症状・診断】

早期発見、早期治療が重要ですが、肝細胞がんには特有の症状はありません。早期発見のためには、血液検査や腹部超音波検査などの画像検査が必要であり、特に慢性肝炎や肝硬変と診断されている患者さんは定期的な検査が重要です。

#### 【治療】

手術、ラジオ波焼灼術や肝動脈化学塞栓療法といった治療法がまず挙げられます。また、抗癌剤や放射線による治療などを行うこともあります。肝硬変を合併していることが多いため、肝硬変の程度などを考慮して、治療法が選択されます。

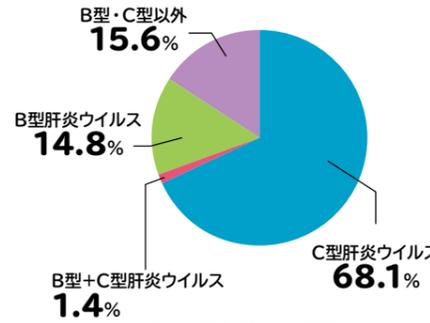


図1. 肝細胞癌の原因 (Taura N, et al. Med Sci Monit 2011; 17: PH7-11を参考に作図)

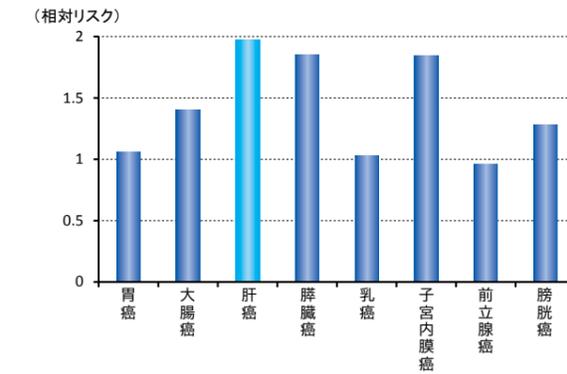


図2. 糖尿病患者の“がん”のリスク

図は糖尿病がない場合に比べてのがんのリスクを示しており、胃癌は糖尿病の有無でリスクに差はほとんどありませんが、肝がんは糖尿病があるとリスクが約2倍となります。糖尿病があると、肝がん、膵臓がん、子宮内臓がんなどになり易いことを示しています。(糖尿病 56; 374-390, 2013を参考に作図)

### 糖尿病患者さんは肝がんにご注意 ～糖尿病患者の死因の17.5%が肝疾患～

日本糖尿病学会が行った糖尿病患者の死因に関する全国調査の結果によると、日本人の糖尿病患者のうち、12.2%が肝がんで、5.3%が肝硬変で亡くなっています。しかも、糖尿病患者の死因で最も多かった悪性新生物（いわゆる癌）は肝がんであり、全死亡に占める肝がん・肝硬変の割合は、男性で20.1%、女性で12.1%と報告されています（堀田饒, 他, 糖尿病 2007; 50: 47-61）。糖尿病は癌のリスクを高める可能性があり、特に肝がんは糖尿病があるとそのリスクは約2倍に増加すると考えられており（図2）、糖尿病患者さんは定期的な肝機能検査や腹部超音波検査が勧められます。